

## ひわだぶき 檜皮葺 こけらぶき 柿葺 とは？

日本では古来、植物を材料として屋根を葺く（＝屋根を作る）ことが行われてきました。中でも檜皮＝檜の樹皮は防水性に優れ、薄く柔らかい素材であることから優美な曲線を持つ屋根を葺くことができ、屋根の中でも最も格式の高いものとして社寺や宮殿建築などで多く用いられてきました。また、木を割り裂いて作る板材を使って葺く屋根は、森林資源に恵まれた日本で古くから用いられていた屋根になります。中でも1分＝約3mmもの薄さの板（柿板）で葺く「柿葺」は、板の薄さゆえに作ることが出来る緩やかな屋根の曲面が魅力、日本が誇る匠の技の象徴です。

しかし屋根は常に風雨や強い日差しに晒される箇所であり、徐々に劣化し時に雨漏りなどの大きな被害をもたらすこともあります。そのため定期的な作り替え＝葺き替え作業は欠かせず、檜皮葺・柿葺屋根の場合20～30年毎に葺き替えが行われます。

月華殿の屋根は、昭和63年（1988）以来大規模な葺き替えは行われておらず、劣化は深刻な状態でした。

※扁額のありか※

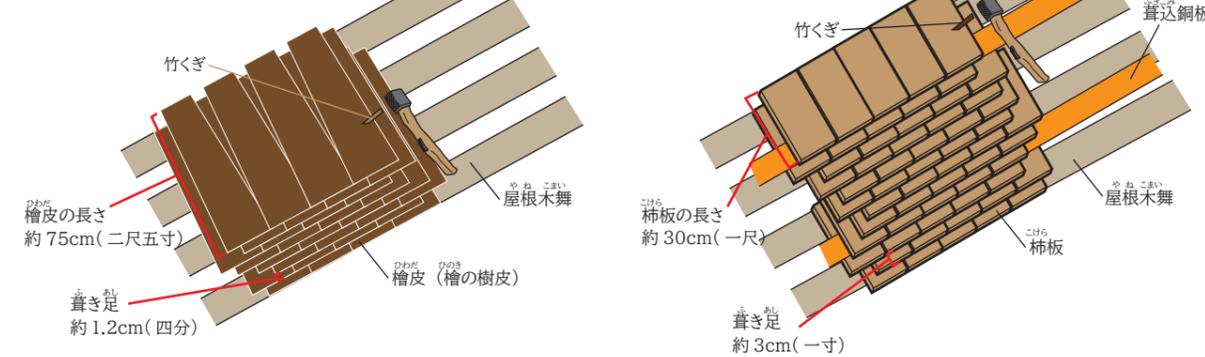
益田鈍翁揮毫→「金毛窟」扁額／松永耳庵揮毫→「白雲邸」扁額



ずいぶん色が  
変わったね～

形を整えた檜の皮（檜皮）を、少しずつずらして並べて屋根を形作り、竹くぎで打ち止めて作った屋根。

木を割り裂いて作った薄板（柿板）を、少しずつずらして屋根を形作り、竹くぎで打ち止めて作った屋根。



### かなづち

竹くぎを叩き打つ時に使います。竹くぎと一緒に握りこんで使うので、柄の形は使う人により様々。使い勝手が良いように、一般に柄は自作するそうです。

### 竹くぎの打ち方

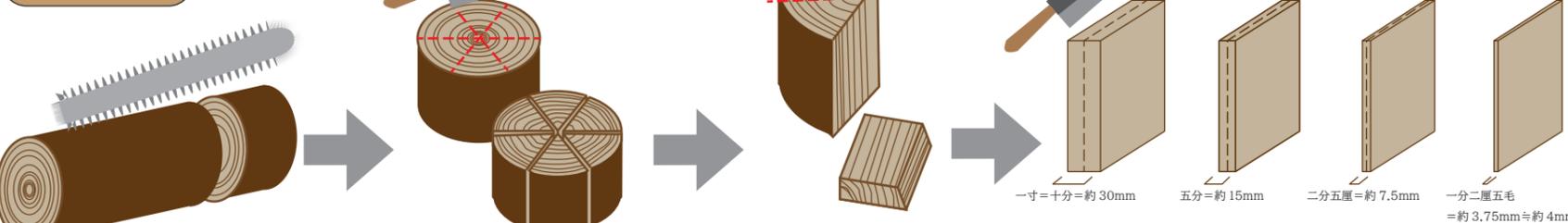
- ①口に含んだ竹くぎを、尖っている方を内側にして一本ずつ口から出します。
- ②口から出したくぎを、かなづちの柄と一緒に握りこみ、柄の途中の金具を使って押し込みます。
- ③押し込んだ竹くぎを、かなづちの上の部分で「トントン」と叩いて打ち付けます。

### ひわだ 檜皮の作り方

檜皮＝檜の樹皮は、立ち木の檜から樹皮を剥がすことで得られます。樹皮を剥がす際は成長細胞を傷つけないよう慎重に行うため、やがて再生し、十数年後にはまた樹皮を採集できます。採集した樹皮は屋根を葺くのに適当な形や長さに整え（拵え）られ、屋根葺き現場に運び込まれます。



### こけら 柿板の作り方



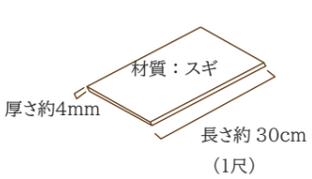
丸太を必要な長さに切る  
(ここでは約30cm)

切った丸太を大割り  
(みかん割り)する

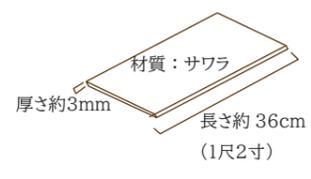
不要部分（芯近くや縁部分）  
を除き、必要な厚さ（こ  
こでは約30mm）の厚板を作る

厚板をへぎ割って厚さを2等分することを繰り返  
し、必要な厚さ（ここでは約4mm）の薄い柿板  
を作り出す。  
※へぎ割る＝ナタで板に割り込みをいれ、木の繊維に  
沿って手で剥ぐように割り裂いて板を割る

### 大正の板



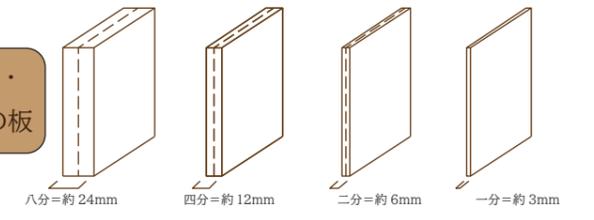
### 昭和・平成の板



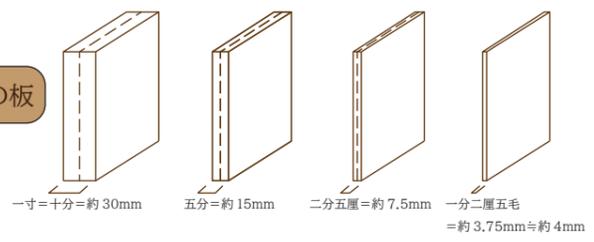
厚さの違い、  
なんでかな？



### 昭和・ 平成の板



### 大正の板



解体作業時に調査を行ったところ、柿葺屋根は大正時代（移築当初）に葺かれた屋根の端材が残されており、当時の仕様が判明しました。残された端材を確認したところ、昭和戦後復旧・平成の葺き替えの際の板とは材種が異なり、サイズは厚くて短かったということが分かったのです。今回修理では大正時代（＝原三溪の時代）の屋根の仕様で葺き上げています。

こけら 柿板は一定の厚みにした板を半分に割り裂く作業を繰り返して作る薄い板です。近年は最初の厚板は八分＝約24mmで、最終的な板は一分＝約3mmのものが作られるのが一般的。しかしかつては一寸＝十分＝約30mmの厚板から割って、最終的に約4mmの板を作ることもありました。

協力：田中社寺株式会社



# 国指定重要文化財月華殿保存修理工事完了記念公開



# 修理工事の記録&みどころ

協力：公益財団法人文化財建造物保存技術協会



建物の内・障壁画や土壁などは大変繊細です。お手を触れないようにお願いします。

## 文化財の概要

名称：月華殿

構造及び形式等：竹の間、檜扇の間及び三面の縁より成る、一重、入母屋造、檜皮葺、庇こけら葺

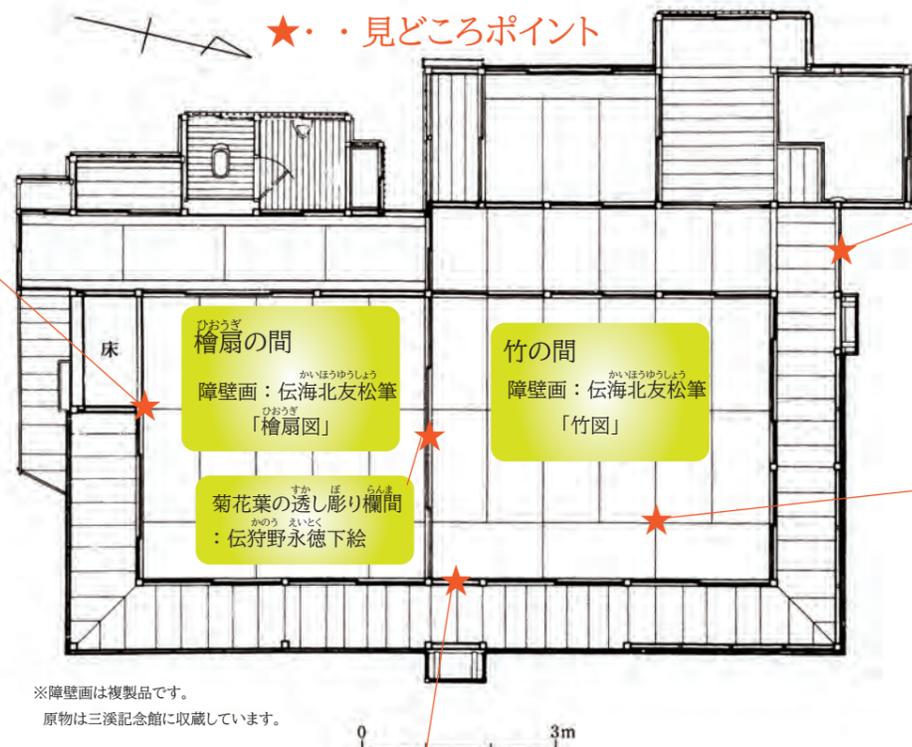
年代：桃山時代（1573-1614）\*

\*この記事中の年代表記は、文化庁指定目録記載内容に準拠しているため、三溪園のパンフレット記載内容とは異なります。

指定年月日：昭和6年（1931）12月14日

経歴：1603年（慶長8年）に徳川家康が京都伏見城内に建てた諸大名の控えの間であった、と伝えられており、1918年（大正7年）に京都・宇治の三室戸寺金蔵院から付属していた茶室（現在の春草廬）とともに三溪園へ移築されました。移築に際しては、運搬のために解体した部材を一本ずつ丁寧に新しい晒し布で巻いて運んだ、といわれています。

工事内容：屋根葺替工事（檜皮葺・柿葺屋根ほか）、および耐震補強工事



※障壁画は複製品です。原物は三溪記念館に収蔵しています。



■扁額  
大正時代に玄関として使われていた、現在の水屋出入口の横の扉の上には「月華殿」と書かれた扁額が掲げられています。今回修理工事に伴い取外したところ、裏面に「大正八年七月 原三溪」と刻まれていることが確認されました。月華殿は大正7年（1918）に移築されたと伝わっており、その後に掲げられたものだといわれています。

♪あわせてお楽しみ♪



三溪園の創設者「原三溪」は、明治～大正時代に茶人として名を馳せたことから「近代三茶人」の一人に数えられます。残りの二人「益田鈍翁」「松永耳庵」も原三溪や三溪園とゆかりが深く、それぞれ園内の建物の扁額を揮毫しました。どこにあるか、探してみてくださいね～

※答えはこの紙面のどこかに！



■畳の表替え【畳】  
月華殿は茶会などで利用されることも多く、また室内は日当たりが良く劣化摩耗が著しかったため取替を行いました。月華殿の畳は芯材が藁でできているため大変重たく、また「小紋高麗縁」という縁の文様合わせがとても手間がかかるもので、職人が一枚一枚丁寧に文様を合わせながら縫い付けていきました。隣り合った畳で縁の文様が綺麗につながっている美しいさまを是非ご覧ください。

■古材はどこ？【各所】  
月華殿は桃山時代に創建され大正時代に移築された建物ですが、実は桃山時代の材料があまり残されていません。特に柱はほとんどが大正時代の材料で、唯一古いものが床の間の「床柱」です。その他古材と確認されているのは継ぎはぎの多い天井材、敷居、鴨居、長押材など。どれが古材か、探してみてください。



■耐震補強【壁】  
月華殿は耐震診断の結果、大地震時に倒壊するリスクが指摘されたため、壁を頑丈にする構造補強を行いました。文化財としての価値を損なわないよう見た目や施工方法に配慮した設計・施工が行われたので、工事前後で大きな違いは見られません。



土壁の復旧（左官作業）

障壁画の復旧（経師作業）



壁の表面（土壁・障壁画）は解体前同様に復旧しました。作業は伝統的な技法で行われています。

壁を頑丈なものに改めるため、壁の表面（土壁・障壁画）・壁の内部（木摺壁）を解体しました。さらに地下には重石を設けるため、床板も一時的に解体しました。※建具等は工事中に破損が無いよう安全確保のため取り外し、また併せて修理しました。

壁を頑丈な構造用合板に改め、床下には鉄筋コンクリートの重石を設置しました。

## 今回工事における耐震壁設置工事の方策

元の壁（木摺壁）  
弱い壁

強い力に耐えきれず壊れてしまうかも

耐震壁（構造用合板）  
強い壁

頑丈なので壊れない

※表面の見た目はあまり変わりませんが、ここでは分かりやすくするため色を変えています。

壁は壊れないが、力に負けて壁ごと浮き上がってしまう可能性がある

地下に鉄筋コンクリートの重石を設け、重石と壁をつなぎ、浮き上がりを防ぐ

耐震壁にする壁（工事前：木摺壁）

下に重石を設置する